

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第2026号 2010年07月12日(月)

## 《 Japan Ruling Party Pummeled in Vote 》

11日に投開票が行われた3年に一度の参議院選挙は、12日未明になって与党・民主党の惨敗、連立与党としても参議院で大きな過半数割れ、という結果に終わりました。事前の各種世論調査よりも、国民の民主党、菅総理大臣に対する評価は厳しかった。この結果日本の政治は、連立の組み直しなど再編成が行われない限りは衆参で勢力図が異なる“ねじれ現象”となる。日本の政治はそれまでの“三流”を通り過ぎて、毎年総理大臣が変わると言う“漂流”が続いているが、しばらくは「その漂流ぶりが深刻化する」と言うことになった。そのことの市場への影響は、本来は円安、日本国債安、さらには株安だろうが、今の世界経済の状況の中で単純にそのような展開になるかどうかは不明だ。

未明の議席確定時点の改選議席(121)に対する各党の獲得議席は、多い順に言うと自民党51(非改選とあわせて84、公示前71 以下同順)、民主党44(同106、116)、みんな10(11、1)、公明9(19、21)、共産3(6、7)、社民2(4、5)、たちあがれ1(3、3)、改革1(2、6)、国民新党0(3、6)などとなった。大きな枠組みで言えば、新議席の分配は与党44、野党77、それを合わせた新参議院の勢力は与党110、野党132。ちょっとやそっとの組み替えでは与党は参議院では多数を取れない負け方だ。これを単純に評せば、「政権運営が困難になるほどの負け」ということになる。

民主党は菅総理大臣が低めに目標とした改選前議席の54を大きく下回って、解散時に連立を組んでいた国民新党も改選対象の3議席を全部失った。どう考えても野党が反対する法案を参議院では単純には通せない状況となった。通すためには自公を巻き込む連立の大幅な組み替え、または政党複数がからむ組み直しか、問題ごとのアドホックな連立、また衆議院に送付し直して三分の二での再可決(これも難しいが)をするしかなくなった。いずれにせよ、大きな「自+民」といった連立ができなければ政局は安定しない事態となった。しかし直ぐにはその可能性は薄い。また、もっとも民主党にとっての連立の対象になると思われる「みんなの党」の渡辺代表は、「我が党はアジェンダの党」と、むしろ高いハードルを明言している。

となると、日本の政治が従来に増して“漂流”する可能性が高いということだ。従来も首相が一年ごとに替わるなどとてもまともな政治が行われてきたとは言えないが、一段と日本の政治の「漂流度が高まる」と言うことだ。

この選挙については、いろいろな見方が出来るだろう。評価はなかなか難しい。しかし、筆者の私見によれば、次のような特徴がある。

1. 一般的には民主党（というより菅総理大臣）が消費税を持ち出したから負けたとなっているが、同じく同税を上げると言った自民党に票が流れていることから見ると、「党内議論もないなど、政権党として消費税の持ち出し方が悪かった」「その後の税還付の基準などで発言がぶれた」ために選挙に響いたと考えられる
2. 参議院選挙の前に雨後の竹の子のように新党が乱立したが、議席を伸ばしたのは「みんな」だけであり、国民のムードは「新党歓迎」ではなく、大きな枠組みとしては民主、自民の枠組みの中で問題の解決に取り組んで欲しいという図式だった
3. 中でも興味深いのは、民主党と連立与党を組んでいた国民新党、社民党とも議席を減らしたことで、このことは国民が両党を連立与党の相方（またはその過去）としては評価していなかったことが示された。特に国民新党については、そのことが言える（選挙基盤を持っていると考えられたのに、今回の獲得議席はゼロ）
4. こうした点を考えると、国民には新党が相次いで登場する今の政治状況を好ましいとは思っていないし、政策の柱としては「バラマキ」よりは、「将来に繋がるしっかりした政策」を日本の政治に求めていると考えられる
5. しかし、その為の受け皿が今の日本の政界にはない

ということだろう。これは悲しいことだが現実だ。日本の政治の漂流は、深刻度を増しながら今後も続くと言うことだ。

### 《 Japanese politics in flux 》

参議院選挙の結果、日本の政治はどう動くのか。昨日の深夜過ぎに記者会見した菅総理大臣は、「私が消費税に触れたことが唐突な感じを持って国民に伝わった。事前の説明が不足していた」「選挙結果は真摯に受け止めながら、私としては改めてスタートラインに立ったという気持ちで政権運営を今後も続けていきたい」と述べた。つまり、続投すると言うことだ。さらに同首相は、責任を問う声が出ている枝野幸男幹事長ら執行部について「これからも職務を全うしてもらいたい」として、留任させる意向を示した。

同首相は今後の政権運営については、「個々のテーマでは他党にも共通テーマがあると思うので、丁寧な国会運営の中で合意できるものは実現を図っていきたい」と述べ、さらに消費税をめぐる超党派協議は「改めて呼びかけたい」とした。しかし、今後の政局が菅総理の思うとおりに動くという保証はない。民主党の党内からは、「執行部の責任」を問う声が必ず上がるし、これだけ後退して執行部がそのままというのは責任の取り方としても国民からも批判を浴びかねない。ではどう執行部を変えるのか。答えは見えない。

次に9月末には民主党の代表選挙がある。ここで再選されなければ通常なら菅さんは首相の座を降りることになる。そうなっても、衆参のねじれ現象は続く。このねじれを解消する方法は連立の組み直しだが、新しい参議院でのギャップを埋める連立は、公明党と組むか、いっそ自民党と大連立を組むしかない。しかしそういう展開は容易には想像できない。ということは、日本の政治は「ねじれ現象」のまま、そして法案通過能力を著しく低下させたまま推移するということになる。

こうした状況は、通常に置いては「円安、日本国債安、さらには株安」となる。しかし状況は複雑だ。日本の政治状況はずっと以前から混迷しているが、それでも円高が進んできた。同じ事は債券高にも言える。民主党の未成熟な財政健全化の試みが失敗したと考えるなら債券安も考えられるが、では日本の機関投資家がどこに資金を移すだろうか考えると有力な代替市場はない。とすれば、日本国債の異常高状態は続くとも予想できる。

状況は複雑だ。しかし筆者は円高圧力は一巡する、日本国債は一時的にも下げ圧力を受ける、株価には少なくとも短気にはマイナスと予想したい。いずれにせよ、日本の政治の漂流はいつものことなので、多少寄りつきで参議院選挙の結果は気にするにしても、その後は世界経済の大きなうねりの中で埋没する可能性が高い。そういう意味では、今週も各国から発表される指標に市場は関心を注ぐことになるろう。今週も「自然体力テスト」が続くことになる。

---

今週の主な予定は以下の通り。

- |          |  |
|----------|--|
| 7月12日(月) | 6月企業物価<br>ユーロ圏財務相会合<br>インド5月鉱工業生産                                |
| 7月13日(火) | 5月鉱工業生産(確報)・設備稼働率<br>6月消費動向指数<br>米5月貿易収支<br>EU財務相理事会             |
| 7月14日(水) | 日銀政策決定会合(15日まで)<br>米6月輸入物価指数<br>米6月小売売上高<br>米5月企業在庫<br>インド6月卸売物価 |
| 7月15日(木) | 6月マンション市場動向<br>白川日銀総裁記者会見<br>米6月生産者物価<br>米7月NY連銀製造業景気指数          |

米7月フィラデルフィア連銀指数  
米6月鉱工業生産・設備稼働率  
中国4-6月GDP  
中国6月生産者物価  
中国6月消費者物価  
中国6月小売売上高  
中国6月鉱工業生産  
中国6月固定資産投資  
トルコ中銀金融政策決定会合

7月16日(金)

5月第3次産業活動指数

日銀金融経済月報

米6月消費者物価

米7月ミシガン大学消費者信頼感指数(速報)

### 《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。相変わらずの梅雨模様。試合ごとに結構ワクワクしたワールドカップは今朝の決勝戦で終了。結果は1-0で、スペインのオランダに対する勝ちで終わりました。延長の後半に勝負がつくという接戦。イエローカードが多数、レッドカードも一枚出る厳しい試合だった。

こうした中で私が注目したのは、前回のドイツ大会に続いて南ア開催でも欧州勢がワントゥスリーを占めたこと。3位はドイツですから。今回欧州開催以外で初めて欧州勢が優勝したことは報じられていますが、実はFIFAのワールドカップの歴史を見ると、欧州勢が2大会に渡ってワントゥスリーに座ったのは歴史にない。

いろいろな見方がある。南アは時差的看着て欧州の時間帯で欧州勢に優位だったという見方、またそもそも南アフリカはオランダ系のボーア人が最初に入植してその後も政治を担い、後で来たイギリス人がビジネスを担ったという歴史があるので、人口の9割が黒人であるにしても基本的には欧州色の濃い国だから、欧州勢には違和感はなかったとの見方。

しかし私は、出てくる選手が圧倒的に欧州のサッカー界で活躍する選手であることを見ながら(朝日新聞によれば76%ほどが欧州で活躍しているという。南アメリカ大陸出身でもその多くが欧州で活躍)、二重の意味で「サッカーのcapital marketは欧州だ」と改めて思っていました。人材、資金の両面で。欧州出身の選手は技量を磨くのに有利です。南アメリカのブラジル、アルゼンチン(パラグアイ、ウルグアイを含めて)出身の選手も欧州でかなりの数が活躍している。その逆は希有です。

次のワールドカップはブラジルで開かれる。南米勢の活躍、それに日本を含めたアジア勢の活躍を期待したい。それでは皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は住信基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したのですが、正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》